

金石範著『火山島』の言語の＜異様さ＞について —表層からの『火山島』へのアプローチ—

玄 善允

はじめに

『火山島』の言語表現における＜異様さ＞の発見

第一章

＜異様さ＞の事例と分類

第二章

＜異様さ＞の原因・理由の推定

第三章

＜異様さ＞を含む金石範の言語表現に関する評価

第四章

＜異様さ＞についての仮説—作家の個性—

結びに代えて

＜異様さ＞の整理と今後の『火山島』研究の課題

キーワード：表層批評、バイリンガル作家、
自由間接話法、意識の流れ

はじめに 『火山島』の言語表現における ＜異様さ＞の発見

今から35年以上も前に、当時すでに世評が高かった金石範の小説『火山島』を苦勞しながら読み終えると、共感と違和感とがないまぜになった微妙な感触を抱いた。それ以来、そのアンビバランスについて論じてみたいと念じながらも、数々の難問に圧倒されて手をこまねくうちに、長年月が経過してしまった。ところが、韓国語版全巻の刊行（2015年）を契機として日韓

両国における再評価の大波¹が起こり、その波に乗せられて長年の懸案に本気で取り組んでみたいという気持ちになった。

そこでまずは準備運動のつもりで、自らの不十分な韓国語能力を重々承知しながらも、敢えて韓国語版全巻に挑戦してみた。そして、なんとか読了にこぎつけてみると、予想外の収穫があった²。それに味をしめて、今度は日本語版全巻の再読も試みたところ、これまた予想外のことが起こった。日本語表現の＜異様さ＞を発見して驚いたのである³。

しかも、よくよく考えてみると、その＜異様さ＞は筆者が若かりし頃に抱いた共感と違和感のアンビバランスと密接に関連していそうな感触もあったので、それを手がかりにして積年の課題であった筆者なりの『火山島』論の第一歩を踏み出すことにした。その覚束ない足取りの成果が玄善允bと玄善允cであり、それらの過程で浮かび上がるようになった問題群の一つである言語の＜異様さ＞に焦点を絞った本稿なのである。

さて、『火山島』は第二次大戦直後の朝鮮半島とそれを取り巻く列強の政治状況、さらには民衆と国家権力との、そしてまた左右のイデオ

¹ 韓国での数々のシンポジウム、日本での岩波書店主催のシンポジウム、そしてオンデマンド版による再刊の開始など。

² 韓国語版の理解しがたい誤訳の発見などはさておいても、筆者にとって難解なはずの韓国語版の方が日

本語版よりも読みやすいという奇妙な印象があった。そうした読後感の要因などについては玄善允bを参照。

³ 日本語版→韓国語版→日本語版といった筆者の『火山島』読書体験の変遷と、その過程における印象の変化についても玄善允bを参照。

ロギー間の血なまぐさい争闘の現場となった四・三事件、その渦中における人間の実存的問題との格闘をトータルに描いた大河小説として、雑誌連載時から既に高く評価されて、単行本の刊行後には権威ある文学賞を授与されるまでに至った。そしてそうした評価は、言語表現、例えば粘着力のある独特の文体、とりわけ多様で特異な比喩などについての高い評価にも基づいていた。例えば、こうである。

「(金石範の) 殆どの小説が、一字一句ゆるがせにできないほどに構成が知的で、緊密である……。その結果、よく練られた構成が、情景や会話と共に高次方程式のような難しさを備えている場合がある。したがって、それを解き進むことができたときは、知的痺れともいえるべきものを感じさせる⁴。」

要するに、読解は決して容易ではないのだが、その困難を克服した暁には尋常ではない達成感に包まれるといったように、選ばれた読者と作品との秘教的な一体感、そして幸福感が語られている。少なからずの評者が口をそろえて高く評価する作家の小説群、その代表が『火山島』に他ならないだけに、その言語表現に対して＜異様さ＞を云々する筆者のほうがむしろ異様と非難にさらされても不思議ではない。

そこで本論では先ず、筆者が言う＜異様さ＞の実態を具体的に提示して、それが何故に筆者には＜異様＞に感じられるかを明らかにしたい(第一章)。次いでは、＜異様さ＞に焦点をあてた筆者の読み方に一定の妥当性が認められるという仮定に立って、それが何によってもたらされたのかを検討する(第二章)。さらには、そうした＜異様さ＞を含む金石範の言語表現に対する他者と当人の評価を参照しながら、改めて、＜異様さ＞の意味を探る(第三章)。以上を受けて＜異様さ＞の要因として、作家の言語

的癖、もしくは限界といった個性性に着目した仮説をたてて、『火山島』及び金石範の主張に関する新たな理解の可能性を模索する(第四章)。そして最後に、本稿の＜異様さ＞についての議論を整理したうえで、今後の『火山島』研究に向けての課題を提示する(結びにかえて)。

尚、＜異様(さ)＞のように、筆者にはそのように感じられたにすぎないという意味限定のために＜＞を付し、(さ)は前後の文脈にあわせて付加もしくは削除して表記するが、それと同じ趣旨で＜＞を付した語が、他にもある。

第一章 ＜異様さ＞の事例と分類

本章では筆者が発見した多様な＜異様さ＞の事例を分類して提示するが、紙幅の都合で作品からの引用は極力限定せざるを得なかった。本章の事例引用部末尾の頁数は『火山島』日本語版第一巻のそれである。また、以下の引用文中で読者に特に注意を求めたい部分は太字とし、特に説明が必要と思われた場合には、簡略なコメントを付している。

(あ) 特定の語彙や言い回しの濫用

① 比喩表現はほとんど常に「まるで～のように」で、「ように」の類の言葉が濫用される。

引用「彼は何かを思いついた**人間のよう**に、**突然**立ち止まって、茫然と人通りをながめやった。**まるで**突っ走ったあとの**ように**、**一瞬不整脈のような動悸**が激しく打って、**胸を締め付けた**。」(27頁)

引用「頬が穴ほこのようにくぼんだ老婆は、……眠るようにして客を待っていた。

⁴ 圓谷真護、471頁

石のように動かない。・・・たばこを楽しんでいるふうだった。まるで阿片でも楽しむように・・・生き残っているようだった。・・・書物のように、連続した・・・なにか自分の周りにぽかっと穴があいたような不安を・・・老婆はじっと、まるで地面に生えた石像のように坐って・・・」(30頁)

- ② <ほかし>表現の濫用：「何か～」、「何も～」、「おそらく」
- ③ 強意表現の濫用：「さえ」、「だけ～」「～しか」
- ④ 漢字語が語幹の動詞にはほとんど常に助詞の「を」付して：「～をする」。例えば「旅行をする」。それ自体はおかしくないのだが、それが地の文ばかりか会話にも頻繁に用いられている。日常会話ならば、目的関係を明示する助詞「を」を省略して「旅行する」のほうが自然というのが筆者の語感である。
- ⑤ 名詞の前にやたらと付される「ある～」。これは英語のcertainもしくは不定冠詞のaに相当するものだろうが、削除しても意味に変化が生じるわけでもなく、むしろそのほうが読みやすく感じられる。
- ⑥ 感覚を表現する際にはほとんど万能のように「～おぼえる」もしくは「～覚える」が用いられる。意味不明というほどのことではないのだが、なんとも耳障り、目障りで、それが限りなく繰り返されると＜異様>に感じられてくる。
引用「頬が内側から紅潮を起こしかけるのをおぼえた。」(55頁)
引用「南承之は一瞬、泥酔いして魚取りに出たという男の話が喉をふさぐのをおぼえた。」(74頁)
- ⑦ その他の類出する語句もしくは言葉遣いとしては、それがなくてもコンテキストで十分にそのニュアンスが伝わっているのに、

「不意に～」、「ふと～」、「いや、～」、「いま～」、「とたんに～」、「～途端～」などが頻繁に用いられる。また、妙でも不思議でもないのに「なんだか奇妙な～」、「妙な～」、「不思議な～」といった類の修飾語が執拗に挟まれる。

(い) 同語反復の濫用。

- ① 同じ語のみならず同じフレーズの繰り返しだが、この小説の言語の大きな特徴である。例えば、特定の人物が登場する度に、まるで長い枕詞のように同じフレーズが際限なく繰り返される。そのために必要以上に文章、そしてもちろん作品全体も長くなる。言葉が多ければ情報が多くなるというわけでもなく、むしろ冗長になって一つ一つの言葉の価値が低下することが多いのに、そうした感覚がこの作家には全くなさそうなのである。
- ② その端的な例としては、主語の執拗な反復があげられる。コンテキストから既に明白な主語がやたらと反復される。「李芳根は～彼は～李芳根は～李芳根は～」といった按配なのである。
引用「柳達鉉は南承之を残して出かけていった。南承之は温かい音突の上に寝ころがって思い切り手足を伸ばしながら、仰向けになった。後ろに組んだ両手に頭をのせて、南承之は電灯の光っている低い天井をぼんやり見た。じっとして・・・」(79頁)
- ③ 「お互いに～同士で～」の類の冗語も目立つ。
- ④ 少し性格が異なりそうだが、呼称についても上記の「冗語」とよく似たことがある。ソウル在住の叔父（主人公・李芳根の妹の有媛が下宿している家の主人）の妻に対しては、ほとんど一貫して「義理の叔母」という呼称が用いられる。この小説で李芳根の叔母として登場するのはその人物だけな

ので、初出時に「叔父の妻で義理の叔母」とでも記しておけば、その後は「叔母」とするだけで十分に人物が特定できるはずなのに。朝鮮社会・文化、そして朝鮮語における親戚関係の厳しい弁別、それに基づく呼称の差異、多様性（特に内と外、つまり父系と母系の区別）を踏襲しているのだから、致し方ないとも思うが、それにしても、なんとも窮屈で面倒という印象が強い。この作家にとっては、そのように書かないと、その人物の存在が立ち上がってこないということなのかもしれない、それくらいは作者の自由に属するのだろう。しかし、読者の立場からすればどうなのかといった、読者に対する配慮がなさそうなのが筆者には不思議である。

(う)「言い換え」の濫用。何かを表現するために用いられた言葉が、直ちに否定されたり、言い換えられる。しかも、それが一度や二度にとどまらず、「～、いや、～いや～」といった按配で繰り返されるのだから、もっぱら後で否定するためにだけ言葉が提示されているように思えてくる。

(え) 重層的で複雑きわまる修飾関係の濫用。修飾語、例えば形容詞（句・節）、副詞（句・節）が何重にも重なるばかりか、すごく長い節の挿入などが濫用された結果、叙述の筋道、例えば、主述の関係、形容語と形容される名詞（句、節）との関係、副詞（句や節）と修飾される用言とのつながりなどを読み取るのにすごく難儀する。

(お) 会話文中（「 」内）で話者同士の関係にはそぐわない言葉遣いが目立つ。また文語調の表現が地の文ばかりか会話文でも多用されており、今から半世紀以上も前の話だとは言っても、いったいだれがそんな言葉を会話で用いていたのか訝しい。これについては後に詳述する。

(か) 上の（お）とよく似たことだが、登場人

物の属性や経歴を考えると奇異に感じられる言葉遣いが、特に会話文に頻出する。済州で生まれて少年時に渡日し、大阪の猪飼野や神戸の長田区などの、上流階級などと言えそうにない環境で暮らし、青年期になってソウル、そして済州で暮らし始めた南承之が、「～さ」、「～だから」、「～よ」、「なんだあ」、「～が皮肉っていつていたっけ～」などと、東京方言もしくは標準語を話す。但し、これについてはもう少し慎重に考えなくてはならない。登場人物が実際にそのような言葉遣いをしているわけではないからである。舞台は朝鮮であり、人物は朝鮮語を話しているのに、書き手（作者）がその朝鮮語を東京方言めいた言葉に「翻訳」しているのである。ソウルの学生である南承之が、少し気取った言葉を用いていることをそうした東京弁で表したということなのかも知れない。しかし、関西で生まれ育ち、その地方語に愛着を持っている筆者からすれば、南承之のような人物に東京弁は似合わないように感じられる。これは、筆者の特殊事情、或いは勝手な思い入れによるものののだろうか。

(き) 比喩表現の過剰な累積。(え) とも重なるが、この作品ではべたべたの厚化粧とでも言いたくなるほどに比喩表現が累積されている。しかし、それについては別個に本格的に検討するつもりなので、本稿では立ち入らない。

(く) () が付されている理由が分からない () 付き挿入文が、特に地の文で頻出するが、それについても後に詳述する。

以上の事例・分類には、それ単独ならば何ら＜異様＞でなくても、それが繰り返されたり、他のよく似た語彙や言い回しと絡み合うと＜異様＞に思われてくるような場合もある。或いはまた、それ単独で既に＜異様＞に感じられるので、文章指導などでは、粗雑、拙劣、不適切を理由として削除や修正を求められかねな

いものもある。ともかくそうしたものが何重にも絡み合っただけで文章全体、さらには作品全体を埋め尽くしている印象が圧倒的なものである。

但し、こうした議論には幾重もの厳しい反論が予想される。先ずはコンテキストから断片を恣意的に切り取るばかりか、それを盾にして批判を展開しているといった非難があるだろう。また、文学作品の言語表現の独自性の尊重に関わる問題もある。『火山島』は文学作品であり、作家の個性的な芸術表現なのだから、一般に流布し消費されるような文章とは次元が異なるといった考え方もあるだろう。しかしそれなら、上で挙げた＜異様さ＞がその芸術なるものとどのように関係するのかを考えないわけにはいくまい。あるいはまた、そうした＜異様さ＞こそが金石範文学の魅力だと主張する人もいるかもしれない。さらにはまた、その程度の「粗」は他の際立った美質、例えば闇に葬られた歴史の掘り起こしその他の社会的意義や独創性を考慮に入れば、取るに足りないと思える人もいるかもしれない。つまり、文章（表層）がどうであれ、肝心なのはそれによって表現された思想（深層）だとしても言うのであろう。しかし、小説の言葉遣いや文体とは別に小説の思想があるというもおかしな話ではなかろうか。

そこで以下では、＜異様＞という筆者の感触に一定の妥当性を想定して、そうした＜異様さ＞が何故に生じたのかを考えてみたい。

第二章 ＜異様さ＞の原因・理由の推定

2-1-1 叙述形式がもたらした＜異様さ＞

本節では、先ずこの小説の叙述形式全般を概観したうえで、「地の文」において作者が採用した三種の叙述方法（自由間接話法、意識の流れ、（ ）付き挿入文）を取りあげて、それとの関連で＜異様さ＞について検討する。

この小説は会話文と地の文とで構成されてお

り、その限りでは一般の小説となら変わらない。また、その両者の各々に（ ）付で文（句、節など）が挿入されているのだが（以下では（ ）付き挿入文と表記）、それも何ら特異なことではない。要するに、この小説は形式的には、通常の会話体とそこに挿入された（ ）付き文、地の文とそこに挿入された（ ）付き文とで構成されている。以下では先ず、地の文について検討する。

地の文には多様な叙述内容があり、その主なものを挙げれば、（ア）小説の背景説明（地理、文化、政治など）、（イ）個々の場面の状況説明、（ウ）作中人物たちの言動その他、（エ）主人公たちの内面描写であり、それらが三人称で語られる。つまり、語るのは語り手のはずなのである。そして実際にそうであれば、つまり語り手が登場人物たちを超越した言わば「神の視点」で客観を装って語れば、歴史その他の背景説明や状況描写、さらには、登場人物の言動なども相当にくっきりとした輪郭を備え、読者としては理解が容易だろう。しかしその反面、登場人物の内面、つまり主観の世界はもっぱら外面に現れた現象の叙述によって語らざるをえなくなる。そのために、この小説のおそらく大きな眼目の一つである歴史の中におかれた人間の意識や無意識の思考なり感情、そしてその変化の過程を表現するのは難しくなる。

そこでこの小説では、一般的な三人称叙述のほか、形式的には三人称の体裁を取りながらも、実際には一人称的な叙述が多く組み込まれている。例えば、上掲の（エ）がその典型であり、そこでは主要な登場人物である李芳根と南承之の二人（以下では主人公たちと表記）に限って、その内面が内側から描かれる。つまり主人公たちの意識や無意識の層にまで立ち入って、その時々刻々の変化が生々しい形で描かれる。これが＜意識の流れ＞的手法と呼ばれるものののだが、その手法については後述する。

そればかりか、上掲の（ウ）の項目についても、語り手の口を借りているようではあっても、実は主人公の二人のうちのどちらかの視点を通して、その他の登場人物の言動や内面が語られる。さらには、本来は語り手が客観的な装いのもとで語るのが最もふさわしいはずの（ア）と（イ）についても、これまた主人公たちの視点を通した描写を数多く含んでいる。と言うよりむしろ、視点が語り手のそれなのか主人公たちのそれなのかの判断がつかないことが多い。

以上のことを、小説の一節を引用して説明を試みる。

引用「～警察のある構内の門から出てきた老婆たちの姿は、大きな嘆息が聞こえてくるほどにひどく打ち萎れて見える。それは南承之の眼にもはっきりしているものだった。」（第一巻24頁）。

上の文章が位置している章の地の文は概ね、主人公の片割れである南承之の視点による叙述もしくは描写と見なせる。したがって、「～見える」のは当然、南承之に見えているはずなので、その後に続く「それは南承之の云々」は無用な同語反復ということになる。それを承知の上での強調のつもりなのかもしれないが、それでもやはり蛇足と言うべきだろう。

ところが、この部分は以上とは別様に読むことができないわけでもない。全知全能の語り手の視点、それから南承之という一個人の視点、そうした視点の移行過程が描写されていると見なすこともできる。そのように考えれば、「同語反復」というコメントは的外れであるばかりか、群衆の中から主人公が浮かび上がってくる瞬間が鮮やかに捉えられているといったように、この小説の語りの美質の一つとして取り上げることもできる。

要するに、視点が曖昧（あるいは両義的）だからこそ、語りは主人公たち個々の視点と語り

手の視点との間を自由自在に往来する。逆に言えば、語りがなんの断りもなしに二つの視点を往来するからこそ、視点が曖昧になり、それに伴って言葉遣いにも混乱が生じ、往々にして＜異様＞な読後感をもたらす。

2-1-2 ＜自由間接話法＞

そのような語り手の視点の移動の自在さが何によって保障されているかと言えば、何よりも日本語が備える文法的な柔軟さがあるだろう。例えば、日本語は主語なしでも文が成立する。それだけではない。語り手の視点による客観的叙述なのか登場人物の一人による主観的叙述なのか定かでない曖昧性が、＜自由間接話法＞の採用によって保障されている。三人称叙述でありながらも作中人物の内面深くに踏み込んだ叙述、それが可能なのはこの手法の作用が大きい。

さて、その＜自由間接話法＞とは、ごく単純化して言えば、次のようなことである。説明を分かりやすくするために英文を用いるが、そもそも主語なしで文章が成立しうる日本語の場合は、もっと曖昧かつ柔軟な文章にもなりうるのだが、とにかく例文とその説明に入る。

(He said that) she had committed the crime.

冒頭の（ ）内を省略するのが＜自由間接話法＞的な叙述である。それによって、発話主体が隠蔽されて、この文章は個人の陳述なのではなく、語り手によって伝えられた客観的事実のようにも読まれうる。但し、英語やフランス語などの欧米語では時制が明確なので、この文の時制が過去完了形であることに留意して、省略された主語と伝達動詞と接続詞を想定して、本来は特定個人の陳述でありながらも、その事実が曖昧化されていると推察する読者もいるかもしれない。その他、この一節が置かれたコンテキスト次第で、登場人物個人の発話なのか、或いはまた語り手による発話なのか、解釈は変わ

りうる。言い換えれば、この一節だけでは語りの主体の特定が難しい。

これは作家にとって都合がいい。というのも、作中人物の一人の視点によるものならば、その陳述内容は数ある視点の一つとして受け止められるが、語り手によるものだとすれば、作家或いは社会が認定した「普遍的真理」もしくは「確定した歴史的事実」のように受け取られるだろう。このように発話主体が誰かによって、読者の受け取り方には大きな差異が生じる。そこで、それを曖昧にすることによって、読者に対して「作家が真理と信じるもの」の刷り込みを、それとなく行うことも可能だからである。

しかし、その反面、読者はその叙述の主体を特定して、その主体に対して叙述内容の根拠や責任を問う可能性が閉じられ、感情移入を拒まれているようなストレスを抱え持ちかねない。あげくには、読者と作品世界との乖離が限界を越えて、読み続けるのが難しくなったりもする。

そうした不都合を容易に想定できるはずなのに、作者があえてそういう手法を用いたのには、やはり作者なりの理屈や信憑のようなものがあつたのだろうが、ここではそこには踏み込まない⁵。

2-1-3 ＜意識の流れ⁶＞による内面描写

さて、上述のように＜自由間接話法＞は作者にとってすこぶる便利なものではあるが、読者にとっては厄介なものである。それなのに、この小説の地の文の語りは、読者に対してさらに

難関を設けている。＜自由間接話法＞を駆使した内面描写が、合理的に整序されていて読みやすく分かりやすいといったものとは程遠いのである。

地の文の中でもとりわけそれが如実に表れるのは、上の（エ）で挙げた二人の主人公たちの心理や発話されない内的言語を描く＜意識の流れ＞的叙述である。この小説ではその二人だけが内面を備えるばかりか、その本人が自らの内面を表出する権利も与えられているといったように、二重の意味で特権的存在である。他方それ以外の人物たちは、内面を含めて何もかもが、主人公たち（そして語り手）の視点から眺められ、観察され、推察される存在にすぎない。その結果として、主人公たちと比べるとすごく薄っぺらな存在として表象されざるをえない。

それはさておき、＜意識の流れ＞については、次の説明が大いに参考になる。

「作中人物の独白体を用いる点では内的独白（internal monologue, monologue intérieur）の一種であるが、思考を劇的にまたは論理的に整理して説明するのではなく、知覚、印象、感情、記憶、連想、知的思考など、意識の働きのいっさいを、生成消滅のままに、論理的な脈絡にとらわれずに表現する。……心理の動きを正確に写實的に表現しようとする点では、リアリズム小説が到達した一つの帰結であるといえるが、ことばによって整理される前の意識の状態を提示しようとする点では、本来表現しえないものを表現する試みであり、リアリズムを超えるものを目ざしている⁷。」

⁵ 語り手と主人公とが共に特権化されているという意味ではほぼ同等のステイタスを付与されるなど、両者の区別が希薄だからこそ、そういうことがありえたのだろう。それについては、後の夢の叙述についての議論でも少し触れているが、玄善允⁶ではさらに詳しく言及しているので参照のこと。

⁶ 管見の限りでは、金石範自身もその他の評者も誰一人と

して、＜意識の流れ＞に言及しておらず、少なくとも現時点においては筆者一人の考えにすぎないので＜＞を付した。＜自由間接話法＞についても同様である）

⁷ 高松雄一「意識の流れ」、日本大百科全書（ニッポニカ）、<https://kotobank.jp/word/https://kotobank.jp/word/%E6%84%8F%E8%AD%98%E3%81%AE%E6%B5%81%E3%82%8C-30527>、最終アクセス2017年1月15日

この簡潔明快な説明の助けを受けると、『火山島』の言語の〈異様さ〉、とりわけその読みがたさの少なくとも一部、例えば既に言葉遣いの〈異様さ〉としてあげた（あ）の特定の語彙の濫用、（い）の同語反復の濫用、（う）の言い換え表現の濫用の多くが、この〈意識の流れ〉の手法の大胆な導入によってもたらされたと考えられそうなのである。

因みに、この小説ではしばしば夢の叙述がなされるが、一般的には読みにくいはずのそうした夢の叙述のほうが、地の文における内面を辿る叙述の難解さと比べれば、むしろ読みやすく感じられる。それほどに〈意識の流れ〉による叙述は辿って理解するのが難しい。ついでに言えば、その夢の叙述も〈意識の流れ〉の描写と同じく、二人の特権的な登場人物にはほぼ限定されている。つまり、作中人物の中では内面を備えるという権利も、夢を見る権利（資格）も、まるでその二人だけに付与されているかのようである。

以上のように作家が採用した数々の叙述手法と〈異様さ〉とは密接な関連がある。つまり、歴史や社会を含めた人間の全体像、とりわけ人間の意識と無意識の層にまで礎を下ろした叙述のための方法的冒険の結果としての〈異様さ〉という側面が確実にある。但し、それで〈異様さ〉のすべてが説明されるわけではないし、合理的解釈の彼方にある、いわば超現実としての真実の探索のための果敢な方法的挑戦であったとしても、もっと明快で丁寧な、つまり、読者にやさしい言語表現も可能だったのではという疑問が拭えない。しかも、そうした疑問は、例えば次のような手法に対する違和感も絡んで増幅する。

2-1-4 地の文における（ ）付挿入文

先にも述べたことだが、この小説では会話文でも地の文でも（ ）付挿入文が随所にある

が、それは二種類に大別できる。一つは朝鮮の風習や朝鮮語の語句などについての説明である。もう一つは、実際には発話されず、意識や無意識内での〈内的言語〉とでも呼べそうなものである。その点については、会話文と地の文の違いはない。それにまた前者、つまり語句などの説明の場合は、会話文と地の文の双方において何ら問題はない。ところが、〈内的言語〉に属する（ ）付き挿入文が読者に与える印象は、会話文中と地の文中とで大いに異なる。会話文中の場合、（ ）付で挿入された話者の〈内的言語〉は直接話法で記されている会話文と明確に差別化され、読者はとまどわずに、文章の流れに身を任すことができる。

それに対して、地の文の場合、〈意識の流れ〉による内面叙述が連綿と続く中に、さらに（ ）付きの内的言語らしい文章が挿入されると、（ ）は殆ど弁別機能を失うので、（ ）の付加基準が便宜的もしくは無原則のように感じられ、そのあげくには、作家が自らの文章に対してどこまで意識的なのかについて疑念が膨らむ。

要するに、作家が採用した叙述方式など意識的な方法論だけでは、〈異様さ〉の全体を説明できない。しかも、そうした方法論的な挑戦が、意図通りに実現しているのかどうかについても、甚だ疑わしい。

2-2 会話文の〈異様さ〉—二つの言語の葛藤—

2-2-1 バイリンガル作家の越境小説

本項では、特に会話文で露呈する、作者における二つの言語の拮抗・葛藤、もしくは絡み合いによってもたらされた〈異様さ〉について考える。

外国が舞台で、登場人物もその地の言葉を話すという設定でありながらも日本語で書かれた小説が少なからずあるが、そんな小説の日本語

に、その地の人たちが実際に話している言葉が干渉することはあまりないだろう。特に書き手がその土地の言語に習熟していない場合には、地の文はもちろん会話文も、端から日本語で構想され、そのまま日本語で叙述される。時には読者の異国趣味を満足させるために「現地語」がカタカナ表記などで少しばかり挟まれたりはするだろうが、それは小説の言語全体にたいして影響を与えたりはしないだろう。しかし、金石範の済州島関連の小説、とりわけ『火山島』はそれとは大きく異なる。

『火山島』の舞台は朝鮮では済州島とソウル、日本では大阪や神戸のもっぱら在日朝鮮人の世界であり、登場人物のはほぼすべてが朝鮮人、特に済州出身者である。したがって、それらの人物が実際に話している言葉は主に朝鮮語とりわけその地方語である済州語なのだが、その会話が小説では日本語で記されている。ここまでは上記の外国を舞台にした一般の小説群とたいして変わりなさそうなのだが、実は大きな違いがある。作者である金石範のバイリンガル性が作用して、特に会話文は現実に話された「原語」の＜日本語訳＞の性格が色濃い。つまり、その日本語には「原語」の干渉が少なからず生じる。

因みに、作者のバイリンガル性というのは、次のような事情のことである。金石範は日本で生まれ、初等教育から高等教育まで一貫して日本語で教育を受ける一方で、幼少期には大阪の猪飼野地域、つまり済州島出身者集住地域で暮らすなど、公教育での日本語と、日常世界の済州語或いはそれと大阪弁のチャンボン語が、彼の言語世界だった。しかも、その後の青年期、さらには成人してからの左翼的民族主義を標榜する在日朝鮮人組織やその運動家たちとの濃密な接触と交友、済州島やソウルにおける複数回

の滞在なども相まって、朝鮮語そしてその地方語である済州語に相当に習熟し、一時期には朝鮮語でも小説を書いていた。つまり、話し言葉と書き言葉の両面において、二つの言語を十全に使いこなせる、実に稀なバイリンガル作家なのである。

2-2-2 二つの言語の葛藤とその克服もしくは妥協

それほどバイリンガル作家だからこそ、創作過程では二つの言語のせめぎあいが生じ、それが小説の言語に干渉して難儀したらしい。当人がその事実を認めるばかりか、そのことを自らの文章の特異性と主張している。つまり、二重言語の拮抗・葛藤から生まれた日本語小説というのが、本人の自己認識であり主張でもある。

「私の書く作品の言葉の問題は、いったん朝鮮語で書いたものを日本語に翻訳するというようなことではないんです。頭の中での日本語と朝鮮語との葛藤などからくる操作はありますよ。朝鮮なら朝鮮、済州島を舞台にして向こうの風俗とか、またいろいろな会話を書く場合には、本当に日本語で出てこないことがいっぱいあります。それはいつも頭の中でいろんな葛藤を経てですね、・・・しかしそれは翻訳をしているわけではない。現実に書かれた作品というのは、言葉というのは、私の体を通るものですよ。頭じゃないですね。私の体内を通過して、そして生まれた日本語です⁸。」

このように、金石範は自らの作品の言語的特殊性を自覚しているからこそ、日本語で創作するにあたっては、登場人物たちが実際に話していたはずの言語に対する配慮を怠らず、しかもその一方で、それを小説の言語たる日本語に可能な限り反映させるために工夫を凝らしてい

⁸ 金石範h、201頁

る。例えば、朝鮮語と日本語の両方で同じ漢字語が使われていても、その意味に少しでもずれが生じていそうな場合には、その漢字語を避けるなど、日本語としての正確さに留意したとも述べており、そうした努力の痕跡は『火山島』の会話文を読めば一目瞭然である。「はい」を「イエー」、妹が兄を呼ぶ際の呼称であるオッパ（両親の呼称であるアボジ、オモニなども同じ）、「なんとも」「やれやれ」などを意味するような間投詞としての「アイグ」など、日本語に訳すのは甚だ容易いはずなのに、原語の音をカタカナ表記している。それは、現実をリアルに再現したいという願望と日本語表現としての許容度とを秤にかけての選択で、適切な工夫と言うべきだろう。それにまた、小説の会話部分が、実際に話された言葉をそのまま筆写すべきなどとゴリゴリのリアリズムを主張する必要もなく、読者がそれなりに納得できるような言葉になっていればそれで十分に違いない。

要するに、バイリンガル作家だからこそ直面せざるを得なかった困難を克服しようとした作者の努力を、筆者も十分に認める。しかし、その一方で、そうした作者の努力の結果なのか、或いはまた、その努力に関わらずなのか、会話文についても随所で異様さな感触を払しょくできない。

2-2-3 会話文の＜異様さ＞

先にも触れたように、朝鮮や在日の文化や言語習慣と日本の一般のそれとの差異を盛り込むにあたって、日本語の普通の語彙や言い回しでは座りが悪い場合、破格の言葉遣いに救いを求めたりすることもあるのだろう。そのようになんとか納得しようとしても、不可解に思わざるを得ない言い回しが目に付く。そうした会話部の＜異様さ＞については、その一部を先に＜異様さ＞の分類の（あ）の④、（お）、（か）などで指摘しておいたが、その要点を改めて箇条書

き風にまとめると次のようになる。

小説の舞台である20世紀半ばの会話には馴染まない古風で堅苦しい言葉遣い、例えば現代会話には馴染まない文語体の使用など。そして、話者同士の関係にはそぐわない言葉遣いなど。さらには、人物の属性に馴染みそうにない言葉遣いなどである。

以上の事例はもっぱら第一巻の序章のものであったので、ここでは別の任意の場所、例えば第一巻第三章の第八節に限定して、改めて少しだけ事例を挙げておこう。どちらも任意の場所のきわめて限られた頁数からの事例紹介であることを考慮に入れば、小説全体にはこの種の＜異様さ＞がいかにか多様に、しかも遍在しているかの推察がつくだろう。

さて、事例の紹介である。まずは、兄が妹を揶揄っているらしい奇妙な敬語（先生が一曲披露されてしかるべきじゃないかね、312頁）。次いでは、妙な文語調の言い回し（話をせねばならないし、312頁）。さらには、過度に文法的な正しさを追求した結果、通りが悪くて、実際に発話してみると舌を噛みそうな表現（～そうなのですよ、305頁）、（約束でもしかねなさそうだったわ、314頁）、同じ会話文中、つまり同一人物の一連の台詞内の文末における不自然な転調（～でしょう。～強い。～なんだよ。～できない。～あるんだ。302頁）（～ないもの。～でしょう。～でしょう。～と思いますわ、315頁）等である。

以上のように、時には話者同士の関係が素直に反映されていないかと思えば、またある時には、関係が杓子定規に反映されすぎて、かえってぎこちなく感じられるなど安定性を欠いて、読者が小説世界に没入するのを妨げる言葉遣いが目立つ。どうしてそのようなことになっているのだろうか。ここでも作家自身の言葉に助けを求めよう。

「常識的な言葉も一つの言葉だけれども、新

しい言葉・新しいものを発見して書こうとする場合、作家は必ずその常識的、一般的な言葉と葛藤を起こします。・・・日本語が持っている呪縛力と同時に、日本語が・・・持っている美しさと機能、そこを無視するわけにはいかないけれども、そこにはあまり足を取られないで・・・日本語の個性を日本語自身に内在する普遍性で超えるということです⁹。」（太字は筆者による強調）

作家自身のこうした言葉を信じれば、読者に＜異様＞に見えても構わないどころか、むしろそうであってこそ、「作家の体を経由した日本語」ということになり、筆者が『火山島』の言語の＜異様さ＞を云々するのもごく自然なことになりそうである。作家の体内に浸透した朝鮮と日本、在日と日本との文化的差異に拘り、それをなんとか表現しようとする執拗な工夫、彼の言う「自分の体内を通過した日本語」がむしろ、この小説の言語、とりわけ会話体の部分の＜異様さ＞を必然化する。しかも、＜異様＞であることを作家自身が百も承知の上どころか、その＜異様さ＞は作者の意識的な産物であり、達成物もしくは功績ということにもなる。

ところが、その＜異様さ＞が故に『火山島』がその分、豊饒な作品になっているのかどうかについて、筆者は作家自身の主張に反して甚だ懐疑的である。言葉遣いが＜異様＞だからその会話が「リアル」には感じられず、そうした会話を含んだ小説世界がリアルに感じられない。

その一方で、その＜異様さ＞が、筆者のようなく常識的＞な読者をして現実の新たな次元への眼を開かせてくれるものであれば幸いなのだが、そのようにも感じられない。しかも、そうした疑問は、ここで検討している会話文に留まらず、数々の叙述手法の影に隠れてしまっているが、地の文の言葉の＜異様さ＞とも連動して

いそうである。そのことも考え合わせれば、この小説の創作過程ばかりか、完成したテキストの表層に露呈する二つの言語の葛藤、その産物としての＜異様さ＞の根は深い。

金石範における二つの言語の葛藤は事実であると同時に、先の引用文にも明らかのように、当人の執着の結果（彼の立場から言えば、努力の果ての成果）でもある。しかも、それだけではない。作者が既に肉体化してしまっているから気づきにくい何ものか、例えば当人には如何ともしがたい限界のようなものも関与しているかもしれない。それを明らかにしてこそ、＜異様さ＞の理由としてこれまでに検討してきた説明だけでは埋めがたかった穴が埋まる。

したがって、そうした作家が意識化できていない限界のようなものの究明によって穴埋め作業をしたいのだが、そのためにも、次章では金石範の言語表現に関する自他の評価を整理する。そして、そうした評価も考慮に入れて、第四章では＜異様さ＞の包括的な理解のための仮説を提示したい。

第三章 ＜異様さ＞を含む金石範の言語表現に関する評価

3-1 方法論としてのごつごつした文体一理解の欲望一

本章では、これまでに検討してきた要因が、いまだ検討していない要因（第四章で仮説として述べる）とも相まって、小説全体にシステムチックに現れた言語の＜異様さ＞、それを支持・称揚する識者たちの議論と、あたかもそれらと一対になっているかのような金石範自身の自己解釈を紹介・検討する。但し、評者たちは具体例をあげての議論ではなく、善く言えば総括的だが、悪く言えば印象批評的なコメントに

⁹ 金石範h、202-203頁

留まっている。他方、作者である金石範の場合は自己認識（もしくは自己の日本語に関する認識）というよりもむしろ、到達目標（理想）としての自己もしくは自らの日本語についての議論の趣が強く、筆者が問題にしている現実の作品における＜異様さ＞とは必ずしも対応しているわけではない。しかし、少なからずの対応部分があると見なせそうなので、そのまま議論を続ける。

まずは、金石範文学の理解モデルを見事に定式化して、同時代はもちろんその後の多くの評価にも決定的な影響を与えたと思われる鶴見俊輔の議論を紹介する。

「金石範氏のはね、文体そのものがごつごつしてる。問題もごつごつしてるし、（笑）文体もごつごつしてる。・・・自分自身の内部に、日本語と朝鮮語がせめぎあっているでしょう。それを表にだしたいっていう、文体の基準がそうになっているじゃないかと思うんだけど、そのくい違いは、一つは文学として、もうひとつは言語として、そしてもう一つは市民生活として、この三つの部分で、日本人とのくい違いをはっきりさせたい、少なくとも向こうに分からせたいし、くい違いがあるということを、自他ともに見過ごすまいという、そういう姿勢だなあ¹⁰。」

以上は『火山島』以前の金石範の作品についての評言なので、その「ごつごつ」が筆者の言う＜異様さ＞に当てはまるかどうかについても問題がなくはないが、後に述べるように『火山島』以前の作品においても『火山島』において

も、言語表現に大きな変化はないと見なせるので、これまたそのまま議論を続ける。

「ごつごつとした文体」が文学として、言語として、市民生活としてといったように、三層における金石範の一貫した方法論に基づくとするこの鶴見の定式は、鋭いだけでなく分かりやすく、しかも説得力がある。そもそも鶴見は、異質なものの排除されたものに対する鋭い触覚を持つ人として、しかも、それを日本の思想や生活に活かす方向性を見出し、人々をその方向へ駆り立てる表現力や行動力など社会運動のリーダー的資質を備えていることでも定評のある人である。そうした能力と姿勢の一環としての在日朝鮮人理解、さらには上のような金石範の文章に対する理解とその表現の仕方は、同じような指向性を持った人々に多大な影響を与えた。例えば、大江健三郎も先の「ごつごつ」に連なるものとして、「自分たち日本人」作家には思いもつかない「面白い表現」を称揚し、それを金石範の内部における二言語の葛藤に基づくものとして、日本語文学への大きな寄与の可能性を見いだす¹¹。

このように、大江や鶴見は金石範の独特な言語表現を称賛するばかりか、日本文学、日本の文化風土、さらには社会風土に対する有効な批判モデルとして活用もする。そしてその後に続く評者たちも、それぞれに特色がないわけではないが、基本的には鶴見、大江ラインの評価の枠を大きく外れないので本稿ではあえて個別に言及しない¹²。

但し、比較的最近の崔真碩（2009）に限っ

¹⁰ 金石範f、210-211頁

¹¹ 金石範d、124頁

¹² 現実の歴史と小説『火山島』の叙述との詳細で実証的な対比に基づく議論を展開している中村福治、金石範のほぼ全作品に関する見事な梗概を作成しながら分析を行っている圓谷真護、作品で作家を、あるいはその反対に、作家を作品で説明して称揚するといった、在日朝鮮人文学の称賛者によく見られる議論を展開する

小野悌次郎など、それぞれに特色はあるが、圓谷については本稿で既に少し触れたし、小野と中村については玄善允aと玄善允bにおいて詳細に検討しているので、参照を請う。その他、川村湊や磯貝治良a,bなども興味深い論を展開しているが、本稿の中心テーマである言語表現関連では何ら特別なことは言っていないので本稿では立ち入らない。

て、本稿の趣旨との対比で少しだけ触れておきたい。崔の議論は金石範の日本語に尋常ではない何かを見出すという意味では本稿と始発点を共にしている。しかし、金石範の理論と創作とを相互矛盾を孕まない一体のものとして捉えている点で、それらの不連続、あるいは不協和音に注目しようとする本稿とは方向性が正反対である¹³。

3-3-2 作家の自己認識—独自の言語論、想像力論、文学論に基づいて創造された＜異様さ＞—

数々の評者からそうした肯定的な評価、あげくは絶賛もされる金石範自身も、それら評言と歩調を合わせるかのように、自らの日本語についての議論を展開する。

「〔筆者：日本語で書く〕朝鮮人作家の自由は、朝鮮人としての主体性を貫くことによって・・・日本語の中に一つの可能性をつくり発見して行かねばならないだろう。日本語であるが、それは日本人の民族的体質のさまざまな反映あるいは具現でもある日本的なものとは違って・・・朝鮮人が日本語で書いても、それは日本語を通して朝鮮人としての自分を実現するものでなくてはならない。・・・それはまた自分を実現するための、いわば奪われたものへの想像力による「奪い返し」の一つといってもいいだろう。・・・私は失われた故郷という全体に向かって、つまりそれは未だに統一ならざる祖国朝鮮であるが、それに向かって迫って行かねばならない¹⁴。』

要するに、日本人にとっての日本語と朝鮮人にとっての日本語とは異なり、朝鮮人作家としての自らの言語は反もしくは非日本語であり、それは自らを植民地的隷属から解放する手立てだと言うのである。但し、それぞれの文末

に留意すれば、この議論はあくまで当為、つまり在日作家に課した努力目標であって、自らの小説作品として実現したというわけではなさそうなことを忘れてはなるまい。

金石範は『火山島』以前の60年代後半から精力的かつ執拗にこうしたエッセイを書き継ぐ。在日論、言語論（或いは、自らの日本語についての議論）、想像力論、そして文学論などをほぼ同型の論理で組み立て、それら総体を「日本語の呪縛」をキーワードにして練り上げる。敵性言語である日本語を用い、その日本語と格闘することによって、普遍的で新しい言語そして作品を創出するといった論理である。

そうした論理型そのものは決して新しいものでも珍しいものでもない。例えば、ナショナリズムを徹底することによってむしろインターナショナリズムへ突き抜けることができるといった、一時期に流行した論法とほぼ同型である。さらに言えば、その言語論は当時流行のソシュール、想像力論やそれと密接に関連した全体小説論などは野間宏や竹内良知を経由したサルトルなどの議論を受けたものであって、自前の独創的なものではないのだが、それ自体は些細なことである。金石範は何をおいても小説家であり、小説の創作の為の議論なのだから、それらの論理が実際にどのように作品として具現されているかが何よりも問題になる。

金石範の理論でさらに留意すべきことは、その理論は自らが日本語でものを書くことに関してのアリバイ証明的な側面を備えていそうなことである。「民族語で書いてこそ正しい朝鮮人である」といった民族陣営の議論に対するアリバイ証明に留まらない。そもそも、そうした民族主義的言語観・人間観に、金石範自身も同調しているのだから、そうした自分自身に対するアリバイ証明もまた含まれていたと考えること

¹³ 崔真碩（2009年）

¹⁴ 金石範d、104頁

ができる。

さらには、その理論は、その理論とその理論によって創り上げられたとされる作品に対する異議や批判を、跳ね飛ばす盾の役割も果たしたかもしれない。自分が用いている日本語は普通の日本語ではなく、反もしくは非日本語として独自のものであるといった主張を前にすれば、誰であれ、とりわけ「善意」の日本人は自らの日本語観に立って金石範の言語に違和感を表明するのは難しい。そこで、君子危うきに近寄らずと見てみぬふりをするか、もっぱら拝聴役に徹するか、さらにはその延長上で理解者・支援者になることで、自らの寛容と理解力を誇るしか選択肢がないといったことにもなりかねない。

民族と言語の一体化・同一化という点ではさぶる古典的な原理主義（本質主義）、生まれてこのかたの日本での生活を仮の姿と見なすほどに徹底した反植民地主義その他の思想と、職業作家として生活していくために日本語で書くしかない現実的諸条件、それらを両立させるために金石範が同時代の文学や哲学や言語学の成果を取り入れながら懸命に練り上げた理論群、その正否を判断する資格も能力も筆者にはないのだが、その理論もしくはテーゼが、『火山島』という文学作品の言語としてどのように実現しているかの検証くらいはできるだろう。むしろそれこそが読者の一人としての筆者の権利であり、本稿の土俵でもある。

第四章 <異様さ>についての仮説—作家の個性—

4-1 書き手の「体を通った日本語」

本章では<異様さ>の由来に関しての、相当に大胆な仮説を提示する。その仮説は、本稿の第二章と第三章で既に検討してきた議論はもちろんのこと、筆者の在日二世としての出自、属

性、さらには60年を越える在日経験によって培われた信憑のようなものも活用して成り立っている。この種の根拠を持ち出すのは、学術論文としてはふさわしくなく、大方の非難・叱正を免れないだろうが、それを覚悟の上で、敢えて解釈の冒険を試みる。

キーワードは、金石範自身のフレーズである「自分の体を通った日本語」なのだが、そこに当人が託した意味に留まらず、当人が意図していなかったであろう側面も含める。後者を死角から救い出して光をあててこそ、そのフレーズは十全な意味を備えて浮かび上がってくるはずである。

一般に、人は自らの骨肉と化してしまったものには気づきにくい。もの書きの場合は、自らの言葉の「癖」、そして言語的思い込みが、それである。例えば、日本語の長所と短所を含めた総合的で柔軟な知識、そして状況に応じた運用能力に関しての、わずかな欠損やゆがみのようなものである。金石範の言語表現のそうした「癖」のようなもの、そしてそれと切り離せない言語感覚に想像を働かせて初めて、作品の言語的<異様さ>に関するこれまでの検討では埋められなかった解釈の穴、それを埋める展望が開けるだろう。

4-2 作家の「癖」の発見

筆者は『火山島』における言語表現の<異様さ>を発見して以降、その原因・理由を求めて、まずは金石範の言語論などのエッセイ群を再読・検討した。ついでは、『火山島』以後の作品を再読・検討し、その時点で当座の仮説を立てた。『火山島』における<異様さ>は60年代後半以降に作家が懸命に練り上げた言語論、文学論、想像力論などによって作者自身が呪縛された結果だったのではないか。さらには、『火山島』に対して評者たちが諸手を挙げて賞賛を送ったのも、彼ら自身の理解の欲望と同時

に、それらの理論の刷り込みが作用していたのではない。そうした二重のしかも実に大胆な仮説だった。

その根拠は次の通りである。『火山島』以後の作品になると、次第に＜異様さ＞が影を潜め、落ち着いて成熟した文章といった印象が強くなる。もっとも、特定のテーマ、例えば政治や文学理論その他に関連する場面ともなると、お得意の＜異様さ＞が群れを成してなだれ込むが、それは例の理論の名残、後遺症にすぎないように思えた。『火山島』では理論的衝迫が絶頂期だったせいで露呈せざるを得なかった＜異様さ＞なのだが、それ以降には次第に外装が剥がれるようにその分量が減り、色も薄くなって、長年の文筆生活の日々の努力によってあたかも自然に醸成された円熟味にとって代わられたのだろう。そのような推察に基づく仮説だった。

そこで、その仮説を検証するために今度は、『火山島』以前、より正確に言えば金石範の理論生産期以前の作品、とりわけその時期の代表作である『鴉の死』を再読してみた。するとたちまちのうちに、その仮説は崩れた。

「鴉の死」は『火山島』の原型とよく言われるが、筆者は再読して、そのことを今さらながらに確認した。テーマの同質性以上に、言葉遣いなどが、殆ど同じである。『火山島』に関して筆者が＜異様さ＞として挙げた言語的特徴の多くが、そこには既に明瞭にある。叙述のスタイルも基本的に変わらない。地の文の三人称叙述は主人公の丁基俊の視点に基づいていたものが、『火山島』ではそれが二人の主人公に分化して、交互に用いられるようになったといった違いはあっても、基本型は変わらない。

それでいながら二つの作品の印象が大きく異なるのは、何よりも分量の圧倒的な差異のせいだろう。中編の「鴉の死」と大河小説を云々されるほどの超大長編である『火山島』とでは、規模とそれに伴う諸々の派生物（読者の記憶力

を喚起するための配慮なのか、間を置いて殆ど同じ文章が繰り返される、例えば、特定の人物が登場する度の長い長いリフレインなど）のせいもあって、前者ではそれほど目立たなかった＜異様さ＞が後者では全面的に露呈して読者を圧倒するからなのだろう。しかも、両者の間には例の当為的理論の錬磨に伴う呪縛もあって、＜異様さ＞が増幅したのだろう。

要するに、＜異様さ＞の要因の一つは、作家が小説を書き始めて以来の、日本語の「癖」だろうと言うのである。誰にだって癖はあるものだから、それ自体は問題とするに足りないのだが、金石範にあっては、その癖が他の要因によって補強されて強固になり、しかも一種の「売り」として主張されるまでに至った。その絶頂が『火山島』だったのではなからうか。

戸は「開く」ではなく「開かれる」でなくてはならず、感覚は何だって「おぼえられる、覚えられる」と表記しなくてはならないとでも言わんばかりの言語的な窮屈さ、意固地な論理性や硬直した文法への執着、そこに露呈していそうな日本語理解の偏狭性が、彼の文章の「癖」の別名なのだろう。

4-3 「癖」を補強する諸要因—他者性の喪失・排斥—

それらの理論は、癖を支え増幅させるばかりか、作家自身を呪縛したのではなからうか。しかも、作家本人だけでなく、理解の欲望に衝き動かされた人々に対して、「金石範作品の正しい読み方」を刷り込む形で呪縛したのではなからうか。作家が理論に基づき創造したとされる言語と物語世界を、小説作品外の作家の議論に沿って理解し称賛する道筋、それを作家の理論が予め準備し、やがて現れた『火山島』に対しては、そうしたラインに沿った論理と心情の一体化現象が出現した。

こうして、金石範とその作品『火山島』に

は、理解者や称賛者は少なからず現れたが、その人たちは独立した他者と言えるような存在ではなかったのではなからうか。誰の意見や教えにも左右されず、もっぱら自らの言語観、審美観に基づいて小説の読解を愉しみはしなかった。教えられ、学び、もっぱら理解を欲望する、実に健気で善き人たちだった。対等な他者として、つまりは自らの肉体性、歴史性によって限界づけられながらも、だからこそ可能な批評というものを、作品と作者に向けて提示するはずもなかった。

理解の欲望に衝き動かされて金石範の独特な表現やそれによって表現されたとする思想の一面を称賛するばかりで、その裏面に張り付いた何ものかには目をつぶった。〈因循姑息〉な日本社会とその文化に抵抗し、それを改変しようとする彼らの使命感にとって、格好の武器の一つが、在日朝鮮人（そして文学）、とりわけ平均的日本人には理解しがたい金石範の文学世界だった。

とは言え、鶴見は実は「ごつごつ」の裏面（つまり、十全な読書を妨げる〈異様さ〉の否定的側面）に対する感受性を持っていたのではないかというのが、筆者の想像である。明言はしなくても、「少しは何とかならないのか」といった密かな眩きが筆者には聞こえてくる。そんな幻聴など、善意の日本人との長年の付き合いで筆者が培ってきた在日二世的信憑にすぎないと言われれば返す言葉がないのだが。

それに、たとえそうした批評がなされていたとしても、在日を理解したいという欲望に衝き動かされた日本人も、金石範に関心を持った数少ない在日の読者も、さらには金石範自身もそれを十全に理解して、まともな応答をしたとは思えない。

既に触れたことだが、敵性言語、そして呪縛としての日本語という立論は、民族語で書けという民族陣営と、ある意味ではそれに同調して

いる自分自身に対する防衛的アリバイ証明であると同時に、本人がどこまで意識していたのか定かではないが、日本人読者に対しての問答無用の攻撃的主張の側面も備えていて、その効果は絶大だったはずだからである。

以上が筆者の大胆きわる仮説なのだが、誤解を避けるために付言しておきたい。何であれ理解する能力、そして理解しようとする欲望が悪からうはずはない。そしてまた、金石範文学を理解しようとするにあたって、その種の称賛的評言が果たした功績を否定できるはずもないし、そうするつもりもない。しかし、何事にも正負がある。称賛と合わせて、日本語ネイティブだからこそ可能な批評、例えば、称賛の裏面に張り付いた何ものかの指摘が伴っていれば、金石範の文学と日本人読者との真の対話の契機になりえたかもしれないと考える筆者としては、すこぶる残念なのである。

作家にとって耳の痛いその種の評言はきつと、『火山島』や金石範文学、ひいては在日朝鮮人とその文学の理解を深める契機になっただろう。少なくとも、次のような金石範のほとんど手放しの自賛に対しても批評的立場を堅持して、それらが提起する問題について、幅広く議論する土壌を準備するくらいの役割は果たせたのではなからうか。

「私は政治主義的な作家だとみられがちなのですが、実は政治を自分の胃袋で飲み込んで消化してしまう、そんな力を持っています。言ってみれば、政治自体を私の文学の血肉にしてみようのです。政治に文学を服従させるのではなく・・・政治が文学に服従するのです、わたしの場合は。そうでなくては、11千枚もの作品（火山島）を政治だけで成立させることはできません。これは文学なのだから。私の文学世界では、政治は私の文学の末尾に位置するものです¹⁵。」（太字は筆者による強調）

¹⁵ 金石範 h、105頁

こうした作家の自賛を真に受けて、声をそろえるばかりかそれをさらに声高に叫んで、自らの理解を誇るような人が数多くいそうな気配もあるが、この種の言葉の真意を把握するにはいくつものステップを踏むなど、慎重な留保が必須だろう。

先ずは、これが韓国の言わば後輩筋の作家との対談の中での言葉であるということを忘れてはならないのだが、そこで言われている政治が何で、文学が何なのかが定かではないし、政治と文学とがそれほど明確に分離できるものなのかどうかも疑わしい。更に言えば、政治と格闘してきたという自持が甚だ強そうな金石範が、政治というもの、そしてそれと二律背反のように挙げられた文学を、これほど軽く語ることに筆者などは呆れかえってしまうほどである。しかし、だからこそ、とりあえずは話半分くらいに受け止めて、例え本人がそのように信じているとしても、それは当人の志向性にすぎず、それが本当に実現しているのかどうかについてはひとまず判断を留保する。そのうえで、読者である自分自身で作品群をしっかり読んで判断するしかない。それが文学作品の読者の権利であり義務でもあるだろう。

金石範の批評眼は相当なものだが、それは何よりも他者に関してであり、自らに対するそれは少々甘いという感じが否めない。それにまた、自分やその仲間に関しては理想と現実とを混同する傾きが強く、そうした傾向を理解者たちの善意が増幅してきたのではないかというのが筆者の推定である。その種の傾向性は視点をずらせば、文学者に必須の「幻視」力と言えないこともなく、必ずしも欠点とは言えない。それでも、そうした作家の作品の読み手としてはやはり、幻視は幻視として、或いは、その可能

性があるものとして判断留保するなど、現実と幻視との腑分けに努めながら議論する術を培うべきだろう。

作家の意図通りに作品ができあがっているはずもなく、作品は作家の理論の反映、結果などではない。理論と実作、或いは作家と作品との間には、大小さまざまなずれ、葛藤、矛盾といったものが忍び込む。そうした実に単純で基本的な文学作品読解の原則、それが在日の文学者、とりわけ金石範や金時鐘に対しては、まともに発揮されていないように思えて、在日二世の筆者としてはやるせない気持ちになる。だからこそ、読者としての自由と義務と権利を厳しく自覚しながら、作品解釈の冒険に取り組みたいのである¹⁶。

結びにかえて ＜異様さ＞の整理と今後の『火山島』研究の課題

本稿では、筆者が『火山島』で発見した言語の＜異様さ＞、そうした感触に一定の妥当性が認められるという仮定に立って、それが何に由来するのかを様々な観点から検討してきた。しかし、それはあくまで、『火山島』と金石範の文学に対する読解の一つの可能性の追求にすぎず、それが唯一の正しい読み方などと主張しているわけではない。本稿は、筆者なりの読解に基づく相当に大胆な仮説も交えて成り立っており、それら個々の妥当性が十分に根拠づけられているともいいがたい。例えば、筆者が「作家の癖」として言及した側面については、作家がそれを自らが承知のうえで意図的にその種の表現を前面に押し出した結果という可能性も否定できないのである。

そのために、その仮説の一角が崩れれば、議

¹⁶ 文学者の自己解釈、自己像とは独立した作品読解について相当に立ち入った議論をしているので、玄善允a

を参照のこと。

論のすべてが瓦解してしまうと見なす向きもあるかもしれないが、筆者はそうには考えない。仮説をあくまでも仮説として意識しながらの解釈の冒険、それが必要な場合があり、本稿のようなテーマはまさにそれにあたると判断したし、一定の根拠を明らかにしたうえで編み上げた仮説あるいは解釈の成果は、たとえそれ自体に誤りが含まれていたとしても、究極的には作品読解に幅と深さをもたらすに違いない。

それにまた、文学作品は表層だけで成り立っているはずもないので、本稿のように表層に限定した議論はそれ自体で閉じた完結的なものでありえない。本稿で企図した表層研究は第一歩にすぎず、その結果を受けた深層についての議論、さらには、深層と表層を有機的に関連・統合した包括的な解釈と評価に向けての研究が今後の課題として待ち受けている。

それをより具体的に言えば、今回の表層の問題提示を基礎にして、今後は①人物像（登場人物）、②それら人物たちと語り手、さらにはそれらと作者との関係、③ストーリー展開と歴史との関係（朝鮮半島の解放政局と4・3事件、歴史と文学）、④小説と読者の関係などの検討を経て、⑤国境を越えた日韓の『火山島』称賛者たちの受容スタイルに見られる〈異様さ〉についてなどと議論は続く。換言すれば、『火山島』の作品評価、次いでは作家・金石範の評価、さらには、作家と読者の関係、そして最後には、在日朝鮮人文学とは、在日とは、といった一連の幅広い議論の展開が求められる。道のりは気が遠くなるほどに長い。

参考文献

- 金石範a『火山島』日本語版第一巻・第七巻文芸春秋社、1982年－1997年
金石範b『火山島』韓国語版第1巻～第12巻、보고사、2015年
金石範c『金石範作品集Ⅰ』、平凡社、2005年
金石範d『ことばの呪縛—「在日朝鮮人文学」と日本語』、

筑摩書房、1972年

金石範e『民族・ことば・文学』、創樹社、1976年

金石範f『在日の思想』、筑摩書房、1981年

金石範g（金時鐘との共著）『なぜ書きつづけてきたか、なぜ沈黙してきたか、済州島4・3事件の記憶と文学』、平凡社、2001年

金石範h『国境を越えるもの—「在日」の文学と政治』、文芸春秋、2004年

磯貝治良a『＜在日＞文学論』、新幹社、2004年

磯貝治良b『＜在日＞文学の変容と継承』、新幹社、2015年

川村湊『生まれたらそこがふるさと、在日朝鮮人文学論』、平凡社、1999年

中村福治『金石範と「火山島」、済州島4・3事件と在日朝鮮人文学』、同時代社、2001年

小野悌次郎『存在の原基 金石範文学』、新幹社、1998年

圓谷真護『光る鏡—金石範の世界』、論創社、2005年

崔真碩「「ことばの呪縛」と闘う、翻訳、芝居、そして文学」『異郷の日本語』、社会評論社、2009年、30－62頁

玄善允a「「詩はメシ」か—サークル詩誌『デンダレ』の前期と金時鐘—」『論潮第六号、金時鐘特集』、論潮の会、2014年、148－183頁

玄善允b「『火山島』の一つの読み方—小説家、語り手、登場人物の関係をめぐって—」ハンドアウト、「第3回済州4・3事件の記憶をめぐる紛争と四・三文学」、2017年3月、立命館大学、

玄善允c「金石範著『火山島』の言語の〈異様さ〉について」ハンドアウト、青丘文庫月例研究会、2017年12月

済州大学校在日済州人センターと耽羅文化研究院との共催シンポジウム「在日済州人文学から世界文学へ—歴史の逆境を越えて平和と共生を志向する金石範文学」報告要旨集、2016年6月22日（原文ハングル）

付記

- 一、本稿はJSPS科研費（15K02454）『トランスナショナルな視座からの済州4・3文学の解明』（代表者：姜信和）の分担研究者としての成果の一部である。
- 二、参考文献中には、口頭発表の際に配布したハンドアウトが複数含まれているが、それらは公刊されていないために、読者が参照する道は閉ざされているという重大な欠陥がある。そこで、そうした大きな不手際を

少しでも補うために、希望の方にはメール添付でそれらの資料をお送りすることになります。筆者の以下のアドレスに請求をお願いします。

sunyoonhyun @yahoo.co.jp